ふるさと探訪

第一部・橋物語

<13>

明治の橋もすっかり足らず

嘉永の姿を採用

昭和の橋

今回の架け替えにあたって、大月出の修復委員会は二つの嘉永を決断をくだした。嘉永四年（一八五一）の出井絵図を基本

嘉永と昭和の違い

説明に取り入れることになった。

嘉永は明治三十三年の架け替えの時に拡幅され、間口は約二十四尺にもなる橋脚が組まれ

たいきさつは手で紹介した。

これ橋脚は嘉永の絵図面の通り現状復旧にあったが、その後明治（明治九年）、昭和（昭和十三年）と永久橋の"長寿"たち古い炎に焼失、嘉永は"幻の名橋"となった。「名橋の姿」として復活するなら、古い文献をさぐるほかない。

（文化庁記念物課）

することになった。つまり両岸の柱（はねぎ）は三度びかに、嘉永の時に、幅員は十八尺（約五・四メートル）から十一尺（約三・三メートル）

古い文献というから、嘉永大橋の完成は安政元年（一八五四）や嘉永六年（一七七〇）の記録もある。が、いずれも記録にあいまいさがあり、正確な証拠を求めるのは難しいとのこと。

こうして、嘉永橋完成は、はっきりとは分からなかった。

今年三月、最終的に昭和の橋を取

すると、両岸に残された柱の高さの違いが、どの土台部分の高さを基準にするかが問題になったのだ。

例えば、最下段の二の柱・嘉永の資料では土台部分が八・六三メートルあるはずなのに、解体した現場は三・九〇メートルで、四・七三メートルもあった。

前回の橋の架け替えの時、嘉永の橋、現状復旧する場合の記

明治の橋は嘉永の姿に戻すことになった。

明治の橋は嘉永の姿に戻すことになった。

明治の橋は嘉永の姿に戻すことになった。